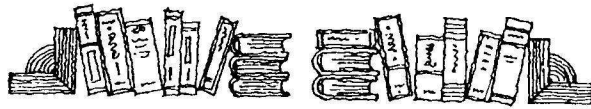


国語国文学会だより



No. 26

2002. 3

日本文学科卒業生の会

国語国文学会 平成十三年度秋季大会 研究発表・公開講演会 報告

平成十三年度秋季大会を十二月十五日(土)、八十年館八五一教室にて開催しました。

◆午前の部(研究発表) 十時～十一時二十分

・「西鶴諸国はなし」考

本学博士課程前期一年 渡邊典子氏

・戦時下佐多作品に見る女たちの連繫

「女三人」「愛の二筋」「扉」を中心に

本学博士課程後期三年 小林美恵子氏

◆午後の部(公開講演会) 十三時～十六時十五分

・「吉田健一 小説と随筆の間」

本学助教授 高橋智子氏

・「日本女子大学に学んで」

岩波ホール総支配人 高野悦子氏

懇親会 十六時半～十八時 於 桜楓二号館

高野悦子氏(社会福祉学科新制1回卒)による公開講演会は創立百周年にふさわしく、日本女子大学で学んだことがどのように現在に結びついているかの具体的なお話で、会場をうめた旧制から在学生までの聴衆は一心に聞き入っていました。懇親会は桜楓2号館において、後藤祥子学長をお迎えし、会からのささやかな花束をお贈りし、ご活躍をお祈りいたしました。

講演要旨

「日本女子大学に学んで」

岩波ホール総支配人 高野悦子

1 高野悦子氏の御紹介

2 母・青春

九十六歳と十一カ月で亡くなった母の、最晩年の十二年間を自宅で介護した。はじめは介護側から一方的に指図をするばかりで、母も痴呆症になつたりしたが、記録映画『痴呆性老人の世界』を見てから、自分のやり方は間違っていたと知り、介護の方法を変えた。母の望むことを納得するようになり、と介護を続けるうち、痴呆の症状もおさまり、よい関係をもつことができるようになった。

母が元気になったとき、カナダ映画『森の中の淑女たち』を見た。七十年代、八十年代の女性たちの話を通して、母のことを考えると、母が繰り返し語る自身の青春時代の思い出の大切さがわかってきた。

3. 女性による女性の顕彰を

平塚らいてうの映画を作ろうという話が起きた。二十世紀に生きた素晴らしい女性の顕彰を映像で行なうことは、私が責任をもっている国際女性映画祭で既に行ってきた。女性による女性の顕彰が必要である。

フランスでは、アリス・ギイという女性の顕彰を始めた。アリスは最初の劇映画(それまでの映画は、全てドキュメンタリーだった)を作り、無声映画の初期、仏・米で合わせて七百本以上監督しているのだが、これまで歴史から抹殺されてい

た。

母の死後はじめて、若いときの母が「青路」を読んでいたことを知り、一生懸命話を聞いていたつもりで、実は大切なことを聞かなかったことに気付いた。そんなときにらいてうの映画のお話があり、母に捧げるつもりでお手伝いをする決心をした。

4 日本女子大での青春

昨年九月に入院、十月に手術という経験をした。いよいよ命が危ないということになって思い出したのが、女子大の頃のことだった。

女学校を卒業したのが昭和二十一年、それから母の勧めで女子大の家政学部生活科学科（現・食物科）に入学した。一年生時代は西生田の寮での生活。食べ物が乏しく、空腹で、日曜日には外出できないので本を濫読した。二年目に目白の寮舎に移った。

入学当初は科学者になろうと思っていた。しかし、蛙の解剖ができず、友人の助けでしのいだものの、自分の性格は自然科学よりは社会科学に向いているのだと思う、社会福祉科に転科した。そこで南博先生に出会い、先生から与えられた研究テーマが「マスメディアとしての映画」だった。

5 映画は健康な人への福祉

当時、映画には、暗く不健康なイメージがあった。南先生に「なぜ映画の勉強をするのか」と尋ねたところ、「映画を含む娯楽というのは、人間に再創造（リ・クリエイト）する力を与えるものである。それは福祉の一つである」という説明に

自分なりに納得し、映画の勉強を始めた。

あるとき、映画と観客との関係を調べるために映画館へ行き、『青い山脈』を見た。それが大変面白く、また観客がたった二時間で元気に意気揚々と変わる姿を見て、映画とは凄いものだと思いを改めた。

この調査のときは帰寮が遅くなり、帰ってみると寒い中で寮監の先生が提灯を下げて待っていてくれた。そのときの感動は今でも忘れられない。

社会福祉科では管支那先生がリーダーだった。先生の話は長いので、私は真面目に聞いていなかったが、卒業後、岩波ホールの仕事を始めると、先生は全ての催し物を御覧になって、葉書をくださった、その批評の素晴らしさに、冷や汗をかきながら先生のお宅へ学生時代のことを謝りに行った。

もうお一人、丹下ウメ先生も忘れられない。物理学の授業では、方程式一つしか覚えずに百点を頂くということもあった。後日、パリの国立映画大学の入試で大変な思いをしたが、試験問題の一つに丹下先生の授業で覚えた方程式が話題された。大学に無事合格し、日本に戻ったときには先生にお礼を申し上げたかったのだが、先生は既に亡くなられていた。女子大で学んだものの価値に後になって気づき、感謝するばかりである。

6 三大綱領

ある日、岩波ホールの仕事をしながら、これは三大綱領を実践していることではないかと思っ

た。
まず、信念徹底。頑固だと言われるが、自分の

人生をかけ、信じることでなければ仕事にならない。更に、自発創生。岩波ホールは映画が没落の時代に入ったときにスタートした。人真似をしていても仕方がない。私から始まる。これも三大綱領にある。また、共同奉仕という言葉が自分の中に植え付けられていたことで、人様の仕事のお手伝いを天から授かった仕事として全力で行うことができている。無意識のうちに、女子大の教育は私の血肉となっていたのである。

女子大で習ったことや、大学の友人に助けられたことも多い。また、時代を越えて残る名作に共通する豊かな人間性を求める目、それも福祉学科で培われたものである。



講演中の高野悦子氏

7 国際女性映画祭

この映画祭を一九八五年に始めたときは、女だけ何がやれるのかという非難を受けた。ところが今では、女性の視点が素晴らしいと誉められている。辛かったが、続けてきて良かったと思う。

映画祭の第一回目には、フランスのジャンヌ・モローさんが参加してくれた。「従来の男性の文化に女性の文化が加わってゆくことで、人間としての文化を作っていく」という発言に、どれだけ勇気づけられたか。こうして映画祭はスタートし、十七年前は一人だけだった日本の女性の映画監督も、今では二十人を越えた。また、十年前に出した『私のシネマ宣言』という本が、昨年度文庫化されることになり、題名が『女性が映画をつくるということ』に変わった。十年前には「題に女性という言葉を入れない」と希望しても通らなかったが、今度は女性とつけるという。世の中は、変わらないようで変わっているのだ、と思う。

女子大学で学ぶメリットは、依頼心がなくなり、決断力が生まれ、自立心が強くなることだと思ふ。また、男性と異なる感性で、ユニークな発想をしてほしい。敗戦により、すべての価値観が変わった中で、大人、特に男性の言葉に御都合主義だという印象を私はもった。しかし、平和になったことは本当に嬉しかった。私は、らいてうの映画のチラシに「二十世紀は大量殺戮の時代、そして女性の人権が芽生えた時期であった」と、まるで戦争が過去のものであるかのような文章を書いた。だが、戦争はひとつも過去ではない。今、

女性の人権と恒久平和の為に戦い続けたいという映画を上映することは、とても意義のあることである。

らいてうを見ると、人間、晩年の生き方が大切だと思う。大病をしてもう命がないと思ったこともあったので、これからは共同奉仕の精神を实践して、世の中のお役に立っていきたい。

8 会場からの質問

「先生が好きな映画のベスト3を教えてください」
フランスの国立映画大学の入試で、映画分析の課題として見た『ゲームの規則』と、日本映画では『狂った一頁』が、人生で忘れられない作品です。



懇親会 後藤祥子学長を囲んで

「吉田健一」小説と随筆の間

本学助教 高橋智子

吉田健一という文学者にとって、文学とはまず楽しめるものでなければならなかった。「時間がたつのを忘れる程度のことなら、それが文学作品の最低条件」であり、「言葉で読むものを魅惑する」ことが「文学の根本条件」（読者の立場から見た今日の日本文学）『横道に逸れた文学論』だというのが、吉田の信念である。特に戦後になつて書かれた随筆には、そうした信念が遺憾なく発揮されているとしてよいだろう。随筆と言つても、随筆という形式に畏まるのではなく、はみ出すものがあつても全く自由に書いて行くのであり、時としてフィクションとの境が明確でないものも混じつていた。

昭和三十一年の四月から七月に亘つて「西日本新聞」に連載された「乞食王子」は、新聞の随筆コラムであり、ごく一般的な随筆に混じつて、時々フィクションに大きくはみ出した部分がある。初回の「発端」から乞食王子というフィクション的な語り手を予告しているばかりでなく、乞食王子が銀座で出会った大男が実は亀の化け物だったという荒唐無稽な作り話「海坊主」といった短編小説と言つてよい回まで登場するのである。

このように小説にはみ出している随筆がある一方で、随筆と紛らわしい小説がある。昭和二十九年に「文芸」に発表された「春の野原」がそれである。吉田は最初小説家志望で、昭和十五年に「過去」という短編小説を、同人誌「批評」に発表

しているが、思うように小説は書けなかったと見え、その後、戦後の「春の野原」に至るまで発表された小説はない。そうした過程で吉田は志望を評論家へと転換してゆき、「春の野原」の時点では評論家として認められるようになっていた。そもそも「春の野原」は吉田が自発的に再度小説にチャレンジしたのではない。初出の目次には吉田の「春の野原」と亀井勝一郎「文化人」、青野季吉「批評家」が「評論家の小説」という題でくくられており、たまたま「文芸」という雑誌が本職の小説家ではない評論家に小説を書かせるという企画を立て、吉田はその依頼に答えたのだろう。

大変面白いのは、この小説「春の野原」の最初の単行本収録が、『宰相御曹司貧窮す』という随筆集だということである。他の収録作品は、後の単行本収録に際しても随筆の扱いなのだが、後に短篇集『酒宴』に収められる「春の野原」も、ここでは随筆扱いなのである。「春の野原」に関して調べて行くと、この作品が全くのフィクションではなく、紛らわしい事実、特に吉田の実体験が随所に混入されていることに気付く。しかし、実体験からアイデアを借りたというよりは、故意に実際の出来事をパロディ化し、しかも実話であるかの印象を与えようとしているかに見えて、これは「小説、つまり嘘っぱち」なのだという一文を滑り込ませていたりする。

このように「春の野原」は、新聞コラム『乞食王子』と同様に随筆と小説の間にあるものである。その他昭和三〇年前後に書かれたものには、

小説と随筆の境界線上に位置するような作品が多い。吉田の仕事区分としては中期にあたるが、要するに随筆や小説といったジャンルに畏まるのではなく、面白いこと、読んで楽しいことへ、筆が滑って行くに任せる自由さが特徴になる。吉田健一と言えば、ユニークな『ヨオロッパの世紀末』や重厚な『時間』といった評論、沈潜した夢幻境を描いた小説『金沢』ということになるが、そうしたところへ辿り付くまでの過程に大変面白い、小説と随筆の間に位置するような一群の作品があることは注目すべきことだろう。

報告・文学散歩

芭蕉ゆかりの地を徒歩と船で

十月二十日(土) 快晴。

江東区芭蕉記念館の広い会議室に集合した参加者は十四名。まず、俳句作家・綾野道江氏ご指導のもとに「奥の細道」冒頭の「月日は百代の過客にして行きかふ年も又旅人も云々」と、全員での音読から今回の文学散歩は始まりました。

綾野氏作成の資料は五枚。奥の細道足跡図、芭蕉について、芭蕉の俳句、漂泊の思ひ、旅立・草加、と芭蕉の生涯と芸術が簡潔にまとめられていて、それだけで芭蕉像を彷彿させるものです。このテキストをもとに、芭蕉の故人への敬慕、未知への旅、漂泊、風雅、蕉門の拡大など、「奥の細道」の旅にこめられた芭蕉の想いを熱く語る綾野氏との質疑応答は、さながら学生時代のゼミの再現。充実した一時間余でした。

それだけに、記念館の「おくのほそ道」、「芭蕉と蕉門の人々」などの展示品も、より新鮮に、一層身近に迫ってくるものを感じました。

記念館をでて、本来の芭蕉庵跡にたつ芭蕉稲荷、広重描く名所江戸百景の一つ、万年橋付近を散策。

昼食後、隅田川にかかる新大橋をわたり浜町から水上バスに乗船。

芭蕉の旅と水路との関係は深い、と多くの研究者が指摘していますが、出立の前夜、芭蕉庵で門人たちと別れの宴をはりながらも共どもに乗船、ようやく「千じゆと云所にて舟よりあが」つて旅立つという、双方の後ろ髪を引かれるような別れ難さ、それを追体験したくての水上バス乗船でした。

しかし、東京湾へ隅田川を往復するコースの両岸は高層ビルが林立、千住は船着き場に立ち寄っただけで、芭蕉と門人たちの哀愁を偲ぶべくもありませんでしたが、そこは数百代の「過客」を経た現代のこと。それなりに、それぞれの芭蕉像が結ばた、堪能の一日でした。(新妻佳珠子記)

二〇二二年三月一日

発行・日本女子大学日本文学科

国語国文学会卒業生の会

〒一一二八六八一

東京都文京区目白台二一八一

日本女子大学 日本文学科内